

狐きつね

一

むかし備中びうちゅうの笠岡かさおかざい在おだに、小田おだという村がありました。その村のはずれの

小山よこての上に、せいげんづかなかという、こけのむした古すいつかがありました。そ

の横手よこてのささやぶなかの中に、お父さんのきつねと子ぎつねとが住すんでいました。

秋あきの、ある月のいいばんのことでした。親おやぎつねは、夜がふけてから、村

の庄屋しよつやの家へにわとりをぬすみに出かけました。子ぎつねはあなの中でま

っていましたが、お父さんは、いつまでたつても帰って来ません。子ぎつねは「もしか、わなにでもかかったのではないだろうか。犬にでも見つかった、かみころされでもしたのではあるまいか。」としんぱいして、村へさがしにいきました。

庄屋しょうやの家は、むろん、しいんとねしずまっています。うらのとり小屋こやの方へまわって見ましたが、親おやぎつねのかげも見えません。ひよいと台所だいどころの方を見ますと、どうしたわけか、入口の戸が半分ほどあいていました。

子ぎつねは、そっと近づいて、のぞいて見ようとしていますと、出あいがしらに、黒いきれでほおかむりをして、着物きもののすそをはしよった二人の男が、足音をころして、ぬっと出て来ました。子ぎつねはあわててそばの井戸いどのかげ

にかくれました。と、そのとき家の中から、

「どろぼうだ。どろぼうだ。」という声がして、大

ぜいがどたどたさわぎ出しました。二人の男は、

いっさんばしりににげ出しました。

子ぎつねはびっくりして、せいげんづかの方へ

向^むかってにげかえりました。少し来てから、ふり

かえって見ますと、庄屋^{しょうや}の家のものたちが、棒^{ぼう}やかまをひっさげて、向^むこう

のおいなりさんの方^むへ向^むかって、かけ出していくのが見えました。

しばらくたつと、どろぼうたちは、とちゅうでどこかへかくれて、みんな

をやりすごしてしまつたらしく、こちらの方^むへ向^むかってかけとんで来^きました。



子ぎつねは、どこのだれだか見てやろうと思って、ひよいと小さなまつの木に化けて立っていました。

二人のどろぼうは子ぎつねのところまで来ますと、ひとりが、

「おい、もうだいじょうぶだよ。ほ、ちようどここにいい目じるしのまつの木がある。この根元へ、金をうずめておこうじゃないか。」と言いました。

もう一人のやつも

「じゃあ、一まずここへうめて、あすのばんほりに来よう。」とこう言って、ぬすんで来た金づつみをふところから出して、子ぎつねの足元へうめました。

「さあ、これでよし。」

「いいか。」と言って、二人は走ってにげました。二人とも、この村のもの

ではありません。子ぎつねにもしらない顔でした。

そのうちに、しやうや庄屋の家のものたちが、ばたばたかけて来ました。

「ちきしょう。どっちへにげたろう。」

「ひよつとしたら、くらしき川の土手どての方へいったかもしれないぞ。」

「そうだ。あっちへ行って見よう。」と、みんなは、よこて横手の小道へかけこみました。

子ぎつねは、ひよいと、もとのすがたにかえりました。また引きかえして、お父さんをさがそうかと思いましたが、しやうや庄屋の家のものがお起きているので、やめました。子ぎつねはどろぼうのかくしたお金をほり出して、あなへ持つて帰りました。お父さんが帰ったら相談して、そうだんしやうや庄屋の家へかえしてやれば、

どんなによるこぶかしのれないと思つたからです。

帰つてみると、お父さんは、まだ帰つていません。どうしたのだらうと、思い思ひしているうちに、村の方で一ばんどりがないて、空がしらみかけて来ました。子ぎつねは、その日いちんち中、お父さんがもう帰るか^まと待ちつづけていましたが、夕方になつても帰つて来ません。子ぎつねは、これは、きつと、^{しよちや}庄屋のわなにかかつたのだと思つて、おんおんなき出しました。

二

夜になりますと、子ぎつねは、なみだをふいて、小さな男の子に化け^ば、金づつみをふところに入れて、村へ出かけました。お父さんがつかまつて、まだ生きてゐるなら、このお金を^{しよちや}庄屋にわたして、お父さんをゆるしてもらお

うと、考えついたのです。

しょうや
庄屋の家の手まえまで来ますと、

「やおよめ入りだ。およめ入りだ。」と子どもたちがさわぎたてています。

と、しょうや庄屋の家の表戸がガラリとあいて、うちじゅう家中のものが、ぞろぞろ見に出ました。子ぎつねは、道ばたの木の下に立って見ていました。

そうしていると、間もなく、ちようちんをもった男の人が五、六人やつて来ました。その後ろからおよめさんの、りっぱなおかごが来しました。

そのあとには、黒もんつきを着た、としまの女の人たちが歩いて来ます。

そのあとへ、ながも長持ちだのいろいろな道具だのをかっいだ人足たちがつづきました。一とうおしまいに、りっぱなたんすをのせた荷車にが来しました。その車

かご…前と後ろから人がかっいで運ぶ乗り物

黒もんつき…黒地に紋がついた着物

としま…三十才なかばから四十才くらいの子の人

長持ち…長方形のふた付きの箱

人足…荷物運びなど力仕事する人

を引いているのは、もうよほどのおじいさんで、あせをたらたらながして、はあはあ息いきをきらせています。そのおじいさんは、子どもになっている子ぎつねの顔を見ると、

「ぼうや、いい子だから、この車の後あとをおしておくれよ。もうじきだからな。」とたのみました。子ぎつねは、ことわろうと思っても、どきまぎして口が開ひらけません。おじいさんは、もう一ぺん同じことを言いました。子ぎつねは仕方しかたなく車の後について、おしていきました。

子ぎつねは、こんなことをしているうちに、お父さんがころされてしまつたらどうしよう、と思うと、なき出したいような気がしました。でも、どうとう十町じゅうまち以上もおして、となり村のある大きなおひやくしよう屋へ着きまし

た。

家の前には、大ぜいの子どもたちが、がやがやたかって、おいおいのもちをもらっていました。子ぎつねが、ふと見ますと、もちをわけてやっているのは庄屋しょうやの家のわか息子むすこでした。子ぎつねは、

「はあ、庄屋しょうやの家と、この家とは、しんるいなんだな。」と思いました。すると、さつきのおじいさんが、もちをどつきり紙につつんでもって来て、

「ぼうや、どうもごくろうさま。これは、おだちんだよ。」と言って子ぎつねにくれました。子ぎつねは庄屋しょうやのむすこむに向かって、

「だんな、あなたの家ではゆうべ、きつねをつかまえやしない？」と聞いてみました。わか息子むすこは、

「おお、よくしってるな。きつねがとり小屋こゝやのわなにかかったよ。」

「へえ、そして、そのきつねをどうしたの。」

「あたりまえなら、むろんたたきころすところだが、今夜、このうちにおよめ取りとがあるんで、今日だけ生かしておいてやったんだ。」

「まだ生きてる？」

「おお。足を引ひつくくつて、柱はしらへしばりつけてあるよ。」

子ぎつねはそれを聞くと、ひた走りに走って庄屋しやうやの家へ来ました。

「こんばんは。」とくぐり戸をあけますと、

「どなたさま。」と女中じよちゆうさんが出て来て、つつ立ったまま、じろじろ顔を見
ています。

「あの、だんなに、少しおねがいがあるの。」と子ぎつねは言いました。

「だれだい。」と言って、どま 土間からげなん 下男の一人が出て来ました。

「だんなも、おかみさんも、ごしゅうげんへいって、いなさらないよ。」と言います。子ぎつねは、どま 土間へ手をついてじぶんがきつねの子であることを話し、どうぞお父さんぎつねをゆるして下さいとたのみました。と、げなん 下男は、

「何？」と言うなり、子ぎつねの首ねっこをつかんで、「こんちきしよう。」と、顔を地べたへすりつけました。子ぎつねは、アーンとなき出しました。

「あらあら、よしておやりよ、かわいそうに。」とじょちゆう 女中さんが言いました。

「おい、こいつはきつねの子がば化けてやがんだよ。ゆうべわなにかかったきつねの子なんだってさ。ほ、もちをも持っていやがる。どつかでぬすんで来

下男…ざつようが
かり

ごしゅうげん…け
つこんしき

やがったな。こら、きつねになれ。早くしつぽを出せ。」

げなん

下男はこう言って、ごつんと、げんこで子どものせなかをなぐりつけました。そのひょうしに、子ぎつねのふところから、金のつつみがころげ出ました。下男はげなんおやつと言って、ひろい上げました。

子ぎつねは、ううんと言ったきり気がとおくなりました。

三

子ぎつねが、ふと、自分にかえってみますと、もう朝で、自分は足をなわでくくられて、台所だいどころの柱はしらにつながれていました。そばにはお父さんぎつねがおなじようにくくられたまま、じつと子ぎつねの顔を見つめてなみだをこぼしています。子ぎつねは、

「あつ、お父さん。」と言ったまま、おおんおおんなき出しました。

親おやぎつねは、

「ありがとうありがとう。りこうなお前のおかげで、わしも助かったんだよ。ゆうべおそく息子むすこさんが帰って来られて、何もかも分かったんだ。おとといのぼんここへ入ったどろぼうは、ゆうべ、夜中に野道のわきをあっちこちほりかえして、金をさがしているところを村の人たちにつかまったのだ。お前は、わしの命いのちごいに、お金をほってもって来てくれたのだ。お前の持っていたもちも、ぬすんだものでないことが息子さんのお話ですっかり分かったんだよ。」と、こう言つて、ほろほろなききました。

そこへ庄屋しやうやと息子むすことが出て来ました。息子は、米のごはんむすこに、おつけをか

けたのを、大きなどんぶりばちに入れて、持って来ました。二人は、子ぎつねを見ると、

「ああ、生きかえったな。」と言ってよろこびました。息子^{むすこ}は、親子のきつねのなわをといってくれ、お皿^{なひ}のごはんを食べさせました。庄屋^{しょうや}は、子ぎつねの頭をなでて、

「ゆうべは、下男^{げなん}がひどいことをしてすまなかつた。かんべんしてくれよ。」

と言いました。息子^{むすこ}は、

「こら親^{おや}ぎつね、今度は子^こぎつねにめんじてゆるしてやるが、これからはとりなんぞ、ぬすみに来るんじゃないぞ。おなかがすいたら、いつでも家へこい。たんびにごはんを食^くわせてやるからな。子ぎつねも分かったか。」と言

いました。

きつねの親子は、がつがつ食べながら、はいはい、よく分かりましたというように、頭を下げました。

